

自分ごと（自分の事）として学ぶ子供

1 新学習指導要領が求めるもの

人工知能の進化や情報技術の進展による Society5.0^{*1}が示す社会、グローバル化などにより、人々の生活が大きく変わりつつあります。また、国際社会は、人口問題、自然災害、民族紛争等、当事国だけでは解決できない課題に直面しています。

このように、変化が激しく、複雑な社会を迎えるにあたり、子供たちには、「知識や情報、技術、言語を活用する力」、「他者と協働・対話しながら課題を解決する力」、「展望や目的を持ち、計画的、自律的に活動する力」等、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力、すなわち「生きる力」が求められます。

特に、知識基盤社会に対応していくためには、知識や技能を習得することに加え、それらを組み合わせたり活用したりしながら、課題の解決を図ったり新たな価値を創造したりすることなどが重視されます。

こうした子供を取り巻く環境の変化を踏まえ、新学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）では、これからの学校に求めることを、次のように示しています。

一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること

そして、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力や各教科等の目標や内容を、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を進めることや、教育活動の質的向上及び学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることなどを重視しています。

このように、新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を明確にし、教育課程や学習の質的向上を図りながら、自他を尊重する精神を養い、学びを人生や社会と関係付けながら、「生きる力」を育むことを学校に求めています。

2 静岡県の授業づくりの方向性

静岡県では、これまで学習指導要領の趣旨や内容を踏まえ、教師用指導資料を通して、大切にしたい教育理念や優れた教育実践を示してきました。近年では、『よりよい自分をつくっていくために』（平成 21 年度）で「生涯学習の視点」と「子供中心主義」を基盤とした『『学びの実感』を積み重ねる授業』を示しました。また、『よりよい自分をつくっていくためにⅣ』（平成 27 年度）では、授業改善の視点として「押さえる・仕掛ける・確かめる」について言及し、「大切にしたい授業づくりの基本要素」と「教師の授業づくりを支える学校体制」について示しました。

これまで、各学校においては、子供同士が関わり合いながら考えを深める授業や、子供が持っている資質や能力を引き出し高める授業など、学習指導要領の趣旨に基づく授業実践が行われてきました。このような取組の成果は、全国学力・学習状況調査において、

^{*1} サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会（Society）

「学校生活が楽しい」、「自分にはよいところがある」、「授業が分かる」、「話し合う活動を通じて、考えを深めたり、広げたりしている」等と回答する子供が増えてきたことにも表れています。

一方で、学習活動における子供の思考過程を捉えられず、教師の指導計画に即して展開する授業や、話し合い活動を取り入れてはいるものの、子供は話し合う目的を認識していない授業等が見られることがあります。先述の調査においても、「学習したことを生活の中で活用できるか考える」、「家で自分で計画を立てて勉強する」、「地域や社会をよくするために何をすべきか考える」等の子供の主体性に関わる内容について課題が見られました。

このような課題を改善するためには、子供自らが学習の目的や目標、見通しを持ち、追究していく授業や、学習した内容が人生や社会、生活と結び付き、学ぶ意義を感じるような授業を一層充実していく必要があります。

静岡県では、新学習指導要領の趣旨や内容、これまでの授業実践及び子供の実態を踏まえながら、これからの時代に求められる資質・能力の育成に向けた『学びの実感』を積み重ねる授業』の質的向上を目指します。

3 これからの授業づくりに向けて ～「自分ごと（自分の事）として学ぶ子供」～

静岡県の子供が、主体的に学ぶ姿勢を養い、「生きる力」を育てていくためには、学習の内容や活動を自分の事として捉え、人生や社会、生活等と関連付けたり他者と関わったりしながら学びを深めていく「自分ごと（自分の事）としての学び」が大切になります。

「自分ごと（自分の事）としての学び」では、例えば、次のような子供の姿が考えられます。

- ▶ 既存の資質・能力や興味・関心、学習に関わる経験などを働かせながら、対象に対して問いを持ったり考えを深めたりしている。
- ▶ 他者との協働や対話を繰り返しながら様々な考えに触れ、自らの問いや考えを変化させたり深めたりしている。
- ▶ 学んだことを振り返り、学習の成果を自覚したり学習の進め方を調整したりしながら、学んだことと人生や社会、生活等とのつながりに気付いたり、新たな問いや考えを持ったりしている。

このような子供の姿が表れるためには、「肯定的な子供観」※²を持ち、「子供にどう教えるのか」から、「子供はどう学ぶのか」、「子供の学びの姿をどう指導につなげるのか」など、「学び手の視点で授業をつくる」ことが求められます。

また、「教材研究」、「子供理解」、「カリキュラム・マネジメント」を基盤としながら、次のようなことを心掛けることが大切です。

- 育成を目指す資質・能力を明確にして授業を構想する。
- 子供の思考過程を生かして授業を展開する。
- 資質・能力の伸長について子供と共有する。

各学校において、新学習指導要領、静岡県の授業づくりの方向性及び子供の実態を踏まえながら、授業改善が推進され、子供一人一人の学びの充実が一層図られることを願います。

※²「子供には、知的好奇心や思いやりの心があり、新たなものを創り出したり目的を実現したりする能力が潜在している。」「子供は、自分の中にある能力を発揮したいと考えている。」など、肯定的に子供を捉えようとする見方や考え方

自分ごと（自分の事）として学ぶ子供

時代の変化

- 知識基盤社会
- 予測が困難な時代
- ・Society5.0(超スマート社会)
- 人工知能等の進化や情報技術の進展
- ・グローバル化
- ・人口問題、自然災害、民族紛争 等

日本の子供の実態

- (参考:PISA調査、内閣府調査)
- 国際的に上位の学力
 - 「人の役に立ちたい」と考える子供の割合
 - 協力して問題解決する力
 - 学ぶことと人生や社会とのつながり
 - 学ぶことの楽しさや意義の実感
 - 各場面で発揮される読解力

世界における教育の動向

- 汎用的な能力の育成を重視
- OECDやグローバル企業等が、社会において自立的に生きるために必要な力を提言
- 道徳教育の推進
- 市民性教育など、宗教や文化を越えた、人としてよりよく生きるための道徳性を育成

静岡県の子供のよさ

- 学校生活が楽しい
- 自分にはよいところがある
- 授業が分かる
- 話し合う活動を通じて、考えを深めたり、広げたりしている
- ※全国学力・学習状況調査の結果及び分析より

静岡県の子供の課題

- 根拠や理由を明確に示して自分の考えを述べる
- 学習したことを生活の中で活用できるか考える
- 家で自分で計画を立てて勉強する
- 地域や社会をよくするために何をすべきか考える
- ※全国学力・学習状況調査の結果及び分析より

有徳の人

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等

生きる力

生きて働く
知識・技能

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等

○成果
●課題

学びの実感を積み重ねる

「問いや考え」の再構成

自分

協働・対話

協働・対話

「問いや考え」を持つ

学び手の視点で授業をつくる

育成を目指す
資質・能力を
明確にして授業
を構想する

子供の思考過程
を生かして
授業を展開する

資質・能力の
伸長について
子供と共有する

教材研究

子供理解

カリキュラム・マネジメント

自分ごと（自分の事）として学ぶ子供

「自分ごと（自分の事）としての学び」は、子供が、「問いや考え」を他者との「協働・対話」を繰り返す中で再構成し、その過程で目指す資質・能力を育てていくような「子供が主体となる学習」を目指します。

「問いや考え」を持つ

子供は、教材となる対象や事象との関わりの中で、自分の予想が結果と異なる場合や、他者の見方との違いを認識した時などに、問いや考えを持ちます。

協働・対話

「問いや考え」の再構成

子供は、様々な情報や自他の考えを整理しながら、新たな知識・技能を獲得していきます。
さらに、新たな問いが生まれ、次の学びへつなげるなどして、学びを深めていきます。

学び手の視点で授業をつくる教師

「自分ごと（自分の事）としての学び」を実現していくためには、「肯定的な子供観」に基づきながら「学び手の視点で授業をつくる」ことが大切です。以下、授業づくりにおいて教師が心掛けたいことを示します。

育成を目指す資質・能力を明確にして授業を構想する

学習指導要領や子供の実態に基づいて育成を目指す資質・能力を明確にし、子供の思考過程を具体的に想像しながら単元や題材を構想します。

- ・ 子供の既存の資質・能力や興味・関心、学習に関わる経験などを学びの芽として捉え、学習指導要領に基づいて、単元や題材の目標を設定する。
- ・ 目標や子供の実態に照らして教材の特長を見いだすとともに、子供の視点から教材の魅力を探る。
- ・ 子供自らが持った目的や目標を子供自身が実現していけるよう、子供の思考過程を子供の言葉や姿で具体的に想像し、単元や題材を構想する。

子供の思考過程を生かして授業を展開する

子供の言葉や姿から、考えや取組のよさなどを捉え、子供の思考過程を生かしながら授業を展開します。

- ・ 日頃から子供理解に努め、子供の言葉や姿の背景にある考えや思い、願いなどを捉えて学習課題を設定するなど、子供の考えや思いを学習過程に生かす。
- ・ 協働や対話等の他者と関わることの必然性を子供が感じるよう、その目的や方法を子供と共有する。

資質・能力の伸長について子供と共有する

子供自らが学びを振り返り、学びの積み重ねや成長を実感できるよう、子供の学びを多面的・多角的に評価し、子供と共有します。

- ・ 学習の過程や結果における資質・能力の伸長や学習の進め方を、目標に基づいて多様な方法で様々な視点から評価し、教師の指導改善、子供の資質・能力の育成につなげる。
- ・ 子供自らが振り返ったことや教師が評価したことなどを子供と共有し、子供自身の、学習活動の調整や学習したことの意義・価値の実感につなげる。